

情報メディア論の序論的考察

An Introductory Study of Communicative Medium

上野 正二

(一) はじめに

今日、新聞、テレビ、ラジオをはじめさまざまな情報媒体を通じて、雑多な情報が飛び交っている。そして一方ではこのいわゆる高度情報化社会に対して疑問を抱き、否定的見解を抱くに至り、社会に警告をくり返す少数の人々が居るのに対して、他方では、圧倒的多数の人々だが、この現状を無定見に肯定し、機器を持つことを喜び、情報に流されて嬉々としている。さらには、この状況を冷静な計算のもとに押し進めようという人々も少なくない。しかし、いずれの立場のひとも、この「高度情報化」の本質に関して十分な検討を行っているとは思えない^(一)。門外漢であることを自覚していながらも、筆者のごとき者の駄文がなお意味を持つと考える所以である。

そもそも情報活動の中樞をなし、これ無くしては情報活動が意味を失うと言わねばならない「言語行為」は、すぐれて人間的な行為と言えらるものである(とりわけ一人では成り立たない(人間)の共に生きる社会の紐帯として、あのスグレモノの〈友愛〉さえも、これなくしては形をなさない不可欠な紐帯が言語行為である)。一般には、人間の行為には身体を用いる行為と言語を用いるものがある、というふう^(二)に考えられるであらうが、言語無くしては動作は行われても「行為」は成立しないのである。したがって情報活動というのは、身体を用い道具・機器を使用する言語行為であ

ることになろう。

ところで、何時の時代も、その時代に生を享けこれを保持・育成して行く際に、この言語行為が、積極的に他に関わり自らを生長させるにも、消極的に自らを他から守るにも、極めて重要なものであることが認識されなければならぬ。つまり、言語行為は単に相手に新しい知識・情報を伝えるというだけでなく、相手の何であるかさえ変えるという面が十分に考察されなければならない。いな、この側面こそ先ず十分に考察されなければならない。

今日、「情報」とほぼ同義に用いられる「インフォメーション」に関して、ほとんどの場合「情報を与えること」という理解で済まされている。ときにキケロの *Natura Deorum* 1.5 の用例にも合致する説明であるかのような *in/formation* という言葉は、その語源からいえば、*in/form*、つまりかたちを与えること、質料に形態を付与すること、そのことによって二者の間に差異・パターンが組織されることからきているのである」という説明が見られるが、それもせいぜいのところ「DNAの遺伝情報」と言った用語を包含することが出来るように考慮されたものに止まっている^(三)。

しかし、この語の語源的考察をするならば、*informare* という語に遡り、古典的な用例を検討しないわけには行かないであろう。右のキケロの例は *in animis hominum informatae deorum notiones* (人間の心に形作られた神々の觀念) である。これは対象が「形作られること」に重きが置かれており、*informare* は形、形相 *forma* に向ける *in-* と、形相付けることであつた、と言うことができる。アウグスティヌスの『三位一体論』第十四巻においては、集中的に *conformare, reformare, formare* に並んで *informare* が語られている。また『告白』においては *si primo sanctis tuis literis informatus essem* (もし初めにあなたの聖書によって私が形作られていたら) という

文章が見られる^五。形相とはここではなにかの形、当該のものが何であるかを示すポジティブな形である。したがって「ひとにインフォーメーションを与える」「ひとをインフォームする」というのは、人を人の形に向けて作り出すということである。だが、むしろ人が人を形成するというのは、言うも厚顔無恥の極みである。したがって、ここでは一步退いて、Bが人としての形をなすためになにかの形を伝える、という意味に解さざるを得ないであろう^六。

ここから、インフォーメーションを伝えるというのは、主に「ことば」を用いて他人を教示することである、と考えられるのであるが、この発話行為の目的をめぐって、たとえばアウグスティヌスは、「他人を教える」というようなことはひとには不可能なことであって、教えることが出来るのはただ天にいます唯一なる方のみである、発話者に出来るのはせいぜいのところ、聞く者に内的な問いの場を披くことであるという論を展開するのである。

ところで、序論的な考察であるここでの問題は、仮にことばの伝達を通じて教示ということが可能であるとして、果たして何が伝えられるのか、という点にも及ばなければならぬであろう。少なくとも、先に述べたように、人が人として形成するためのことからの授受ということを抜きにしては、インフォーメーションの考察が成り立たない。インフォーメーションの媒体は、言語に限られないのであるが、何れを採っても、もし人の形成がここに無ければ、このインフォーメーションは無効であり、メディアの使用は〈使用usus〉ではなくして、目的から外れた〈濫用abusus〉であることになる。

以下に、今日的課題となっている情報論の道具立てを検討しながら、本題とすべき情報論の形成を論じてみたい。

(二) 情報メディアウムの種類

先ず「情報の種類」を論じなければならぬ。だが、今日「情報の種類」というと、まずここにあがる「情報メディアウムの種類」が上げられるのが一般的であろう。「情報の種類」と「情報メディアウムの種類」の違いは大きいにもかかわらず。

メディア・メディアウム medium とは手段であり、「媒体」という言葉があらわれる。情報伝達の手段、道具立てである。メディアウムの種類は人間の感覚器官の種類に対応して分類することが出来よう。すなわち、眼、耳、鼻、舌、触覚、プラス一である。

①音、音声（話しことば）

イ、記号としての音声、言語のほかにも、たとえば狼煙の音声型である花火の音の如きもの。記号は情報の発信者と受信者の間にあらかじめ成立している約束事を前提に成り立つものである。特に言語は人の心の中にあるものの記号である、とされる。

ロ、意味分節のない音（楽音、自然音）。発信者の何らかの効果を期待するもの（サブプリミナル音を含む）

②文字、絵画

イ、文字（書きことば）は音声の記号である、と考えられて来た。

しかし、今日ではこの論は通用しないであろう^七。

ロ、絵画は音の場合と類比的に考えられる。サブプリミナル画像の意味に関しては、次節で。

③嗅覚の対象となる情報というのは、今日では一般的ではないが、分類としては掲げておくべきであろう。

④触覚の対象としてのモノ 点字による文字や記号がこれにあたる。

⑤その他 ここに特に現代情報論で無視されている重要なメディアウムとし

て「沈黙」もしくは「媒体欠如」というのが上げられねばならない。その意味に関しては後述する。

ニューメディアとして、右のものを組み合わせたものが特別に取り上げられることが多くなった。これらの特性として、イ、メディアの融合性、ロ、双方向性、ハ、ネットワーク性の三つが上げられる。

情報手段メディアの発達(？)はさまざまいばかりである。現場においてすでに、「時間・空間概念の変容」が大きな問題にされるている。テレビカメラがアメリカの家庭の冷蔵庫の中を写し、今まきに行われている海外の戦争を写す。「メディアは空間的・時間的距離はゼロとしたのである。しかし、それは、時間と空間が拡大したというより、逆に、われわれの時間意識空間意識が、いま、この場所という一点に極小化してしまつたといえる」と。尤も、インフォーメーションを「人間の」言語行為として捉えるという筆者の見方では、この論も不十分である。人間の対面している(情報)対象は、ただ(彼にとつていかなる切実さを有するか・有するべきか)によって決まる。したがって時間・空間も単なる物理学的な時間・空間を問題にするのでは足りず、現象学的時間・現象学的空間が問われなければならないのである。そうすると次のようなことが言えるであろう。

今日、理性もしくは知性の発育不全者たちの中には、グラフィックとかヴィジュアルとかいう名を用いて、新しいメディアム(媒体)・すぐれた情報手段であるかのように宣伝する者があるが、これは全く間違いである。とコラムニスト・山崎コウイチ氏は言う。山崎氏によれば、まさに知性のレベルが低い情報伝達の場合は、音や絵画による情報が授受しやすいが、内容が人間の生活に依じて複雑になると、言語による伝達が断然有利になる。それは当然うなずかれることであろう。オーディオ・ヴィジュアル情報の場合、最も高級な情報は、言語情報を正確に掴めぬ頭脳の持ち主に

は、全く意味を持たぬばかりか、勝手に解される限りにおいて、有害でさえあるのだ。

ところで翻つて大学教育の現状を省みると、大学の講義でこういうものを取り入れる大学をだんだんと見受けるようになったが、これはその講義内容の空疎であることを暴露していることにならないであろうか。教師自身が(言語化)する努力を怠っているのであつたり、学生に概念的な理解を要求しないものであつたりするが、いずれの場合にも歴史性・空間性を根幹とする(学問性)を喪失していると言えそうである。というのも、歴史学的な学においても空間的な学においても、単なる時間及び空間の一場面の見え(species)によつて学が成立するのではない。空間の深み(Der-species)において空間的なものが定位されるのであつて、それは「何であるかの把握speciesを通じてDer」という形が必要なのであるということである。同じく歴史的なことがらも、歴史把握のスペキエスを通じてでなければ、学たり得ない。学たり得ないというのは、一なる全体に関わり得ないということである。一なる全体を言語化するのが「理論」であるから、理論を有し得ず、学として成立していないということである。

だが、これに劣らずに、本当に問題にされなければならないことは、ここにいう最も堅牢な学問を構成する「言語」が重大な瑕疵を負っていると考えられる点であろう。言語の機能について考察してみると、われわれは言葉によつては何も学ぶことができない、ということがある仕方では明らかになる。たとえば先に挙げたアウグスティヌスである。その『教師論』は、情報行為の典型である「語ること」と「聴くこと」は何を目的として行われるのか、というアウグスティヌスに対して、息子アデオダトウスが「教えることか学ぶことか」と思ふ」と答えるところから始まる。

我々は話すとき、相手に何かを伝えようとしている。これを(教えるこ

と」ということができるだろう。また学ぶことを挙げるのは、相手に何かを教えるに値したいとき、その何かを示す必要があるからである、と言う。この後者は結局は、相手に教えることに含まれるとアウグスティヌスは言う。

さらに、話すのは相手に想起させるためであることが確認される。

こうして、

「誰かは反対するかも知れないが、たとえ我々は一言も発声しないにもかかわらず、言葉そのものを思い浮かべているのだから、我々は心の中で内的に話しているのだ。また語ること (locutio) によっては、想起する以外は何もしていないのだ。というのも、言葉がそれに結びついている記憶は、それらの言葉を思い起こすことによつて、事柄そのものを心の中に思い浮かべせるからだ。この事柄そのものの記号が、言葉なのだ」(二節) という小結論を得る。

「一言も発声しないにもかかわらず、言葉そのものを思い浮かべている」とは、音声的な言葉を発するまえに心の中で抱いている言葉のこと。たとえば、犬を猫とは違うあるモノとして認識し、また山の一部を森と見、森の一部を木というように、モノ・コトを或る形で分節する時につきまとうものを考えているのであろう。アウグスティヌスは、後に『三位一体論』で「内的言葉」と言う(大事な問題は、この「内的言葉」のさらに内側に「内的言葉」が存することだが、それはここでは問わぬことにしよう)。

記号について(以下、一九節以下の要約による)……

言葉が記号であるとして、記号 signumとは何か? 記号とは何ものかを表示する significare ものである。したがつて、何も表示しない記号は存在しない。無 nihil という言葉でも、少なくとも何らかの事物の存在しないコトをこの言葉で示す。

記号によつて表示される事物そのものを、記号を用いずに表示できる

か? 指で指し示すことの出来るものはすべて言葉という記号にはよらずに示すことはできるし、さらにパントマイマーに見られるようにほとんどのことがらが言葉を抜きにして表示できる。しかし、これらの動作による表示も、やはり記号である。そういう記号も使わずに(事柄そのもの)を表示することはできないか。

アウグスティヌスは、「歩くとは何か?」と問われて歩いてみせることにより、またその他の問われているモノそのものを、問いの後に示すことによつては、まさに記号によらず、モノ・コトを示していると(六節)。

しかるに彼は、この問題を「もう少し注意深く考察するならば」と言い、「記号によつて学ばれるモノは、おそらく何一つお前は見出さない。自分に記号が与えられても、それが何の記号が知らなければ、その記号は自分には何一つ教え得ない。」(三三節) というのである。

たとえば、caput という音を聞いたとき、はじめはそれが何をさすのかわからない。何度も聞いている中に、自分がすでに知っているものを指すもの(vocabulum)だと分かったのだ……(中略)……caput と呼ばれる記号によつては何一つ学ばない(三四節)。

つまり caput という音を初めて聞く時、それは①単なる音声であるか、②表示記号であるかのいずれかである。①のときは、これを知覚するのは記号によらず、耳を打つ音による。②のときは、表示されるモノが何であるのかを尋ねる。それを知り得るのは、事物を見ることによつてである。

結局「言葉」と呼ばれる記号によつては我々は何一つ学ばないで、言葉の意味を、事物を知ることによつて学ぶのみだ、ということが残るのである。

ただしこの先の議論は、我々がモノ・コトを学ぶのはわれわれの内部にあつて精神を主宰している内的な言葉、Verbum の開示によつてであると

いうこと、したがって、人は学ぶためには外に行かず、内に帰るべきであると言ひ、いま我々が必要としている議論の枠を越えることになる。

(三) 情報の種類

本来、媒体の種類に先立って、情報そのものの種類が考察されなければならない。情報の種類にしたがって媒体の種類が考察されなければならないからである。その都度の媒体の選択、媒体の優劣は、「いかなる情報を伝達するか」に即して決まってくるのである。

ところでさらに、情報の種類を決定する最大の要素というのが考えられるのであつて、それは「情報の目的」である。情報活動は、まさに人間の活動・行為でなければならないのであるが、古来、人間の行為の何であるか (species) はモノのそれへと秩序付けられた「目的」から取られるのである。

では、いかなる種類があるであろうか。この問題を考えるには、我々が情報発信 (言語の使用、その他) するさまざまな場合を考察すればよい。

- ① 他人を誹謗する、非難する
 - ② 他人を称讃する、名誉を回復する
 - ③ 他人を告訴する
 - ④ 自己の弁明をする
 - ⑤ 国家・共同体を正しく働かせるために法を制定する (勸奨と禁止)。
- この①②は弁論述における「演説」に関わるものであり、③④は同じく「裁判」に関わるものである。⑤は同じく「審議」に関わる。
- ⑥ 憤懣を発散する
 - ⑦ 自分の思いを他者の心に流し込む

イ、①⑥の目的に便利に使えるのは、やはり「言語」であろう。グラフィック、意味分節なしの音声などは、背後にある言語による。約束事の上に用をなす。

口、発信者の意図を不特定多数の受信者に覚らせずに、目的を遂行する効果的 (悪魔的) 手段としてサブリミナル音・画像がある。

sublime と同根の語 subliminal が使われるのは何とも皮肉であるが (意識の) 下で sub 仕上げる limo という意味である。

⑧ 他人に根源的一者の声を聞かせる

これに該当する最高のメディアが「沈黙」であることは、友人に意見をしようとして言うべくして言えず沈黙のまま分かれたのが最大の効果を生んだという、世間によくある話 (あるいは甥に説教を頼まれた良寛の話) から分かる。また姦通現場で捕らえられた女をつれてきた法律学者たちやパリサイ派の人々に対して、黙したまま地面に屈み込み何かを書き続けたというイエスのエピソードが印象的である (ヨハネ福音書 8:2-11)。

⑨ その他

この考察は無限に続く。だが、単なる思いつきで整理するのではなく、何らかの必然性を持つて分析しようとするならば、上にかなりにランダムに挙げた目的のいくつかについて、そのさらに目的といったものをよく考察するにしくはないであろう。この究極の目的といったものの考察において、本来的なインフォメーションが実現するか失敗するかの分岐点が明らかになるであろう。したがって、ここに敢えて節を改めて、「情報伝達の目的」を論じることしよう。

(四) 情報伝達の目的

さて、アリストテレスは『レトリカ』第一巻五章において幸福論を展開している。それは第四章までに弁論もしくは弁論術の目的について考察した上で、それらの目的がさらに目的付けられている究極の目的として幸福が位置づけられているからである。

この問題はしたがって、友愛論において真の友愛が成立する根拠を論じて善の三つの相（善そのもの、快としての善、有用善）を論じた『ニコマコス倫理学』と平行することが当然ながら想定できよう。友愛論、それは「共に生きる」ことを離れ得ない人間が如何にして「善き共に生きることを実現することが出来るか、の論なのであった。言いかえれば、友愛論こそ今日のコミュニケーション論の原理的考察なのである。そしてここで大事なことは、今日のコミュニケーション論においては、いかなるコミュニケーションの形態が善きコミュニケーションであるか、をほとんど議論の外に置いており、したがって真の、また善きコミュニケーションの畢竟の拠り所といったものを一切問わないのに比して、アリストテレスはこの畢竟をこそ原理への問いとして明らかにしようとしているのである、ということである。

『レトリカ』第一巻三章で、弁論の目的として、次のように述べられている。「弁論が直接目的とするものは、その種類によつてそれぞれ別である。……審議する者にとつては「利と害」が目的である。……法廷で陳述する者たちにとつては「正・不正」が直接の目的であり……称讃したり非難したりする人々にとつては「美と醜」が目的となる。」議会での審議においては「利と害」が目的となると述べたが、少し検討するととてもそれだけでは終わらない。議会においては①国家の財源の問題、②戦争と平和に関するもの、③国土の防衛、④食糧の確保の問題、⑤国家の安泰が審議

されるとして、何れも国家、国民の「利害」に関わるというのは、それらの審議の結果が単に「有利、有害」であるというのみではなく、有用善が快適善および真正の善を将来させるに有用であるのと同様、他の二つの善の相を含蓄していると見なければならぬであろう。少なくとも『ニコマコス倫理学』のアリストテレスの議論はそのように展開している。

というのも、人間の「いかなる技術、いかなる研究も、同じくまた、いかなる実践や選択も、ことごとく何らかの善を希求していると考えられる」(一)のであり、さらに「種々の場合の目的とするものの間には明らかに一つの差別が見られる」にもかかわらず、「たとえば馬勒製作とかその他すべての馬具の製作は騎馬に、そしてこの騎馬やその他のすべての軍事はさらに統帥に従属している」(共に二)ように、「およそわれわれの行うところのすべてを蔽うごとき目的……われわれはこれをそれ自身のゆえに願望し、その他のものを願望するものもこのもののゆえであり、したがってわれわれがいかなるものを選ぶのも結局はこれ以外のものを目的とするのではない、といったような……が存在するならば、明らかにこのものが「善」であり「最高善」でなければならぬ。」(二)

ここにはアリストテレスにおける難問があるというものの、彼には「人間の営みの最も有力な、最も棟梁的な位置にある善」が考えられており、この善を獲得して活躍することこそ「幸福」と呼ばれるものなのである。してみれば、この幸福を実現する原理である「善」とりわけ真正善こそが、共に生きる生の原理であると同時に、インフォーメーションの原理、畢竟依であることになる。そして、ついでながら述べておくと、幸福はアリストテレス的に言えば人間の理性がよく働いて「人間の最も善きもつとも究極的な卓越性に即しての魂の活動である」(二)のであるから、直接的には機械や道具といったモノによつて人間が幸福にされるということはありえないのである。

(五) 情報 (特にニューメディア) 利用に関する問題点

以上の情報伝達の本来の意義の考察からして、今日的な情報論の問題点も明らかであるだろう。はじめに述べた「濫用」がいかなることであるか、についても。

だが、ここでは敢えて今日の特有の問題を取り上げて、論じておかなければならない。

さて、放送大学テキスト『フロンティア人間科学』において、中島義明氏は「ニューメディアと人間」という主題で「ニューメディア」に係るさまざまな情報を提供した上で、ニューメディア利用の効用(4節) ニューメディア利用の問題点(5節)を論じている。筆者は、氏が「問題点」としているところはそれとして、氏が「効用」と考えている諸点に関して、重大な欠陥の存することを指摘してみたい。ものごとにはいつでも光の部分と影の部分があるのだ、という言い分に拠れば、効用と思われることから当然「問題点」が指摘されてしかるべきであるのだろうか、ことがらによつては単なる裏表の関係では終わらぬ影ばかりのことがらだつてあるのだ。

イ、「利用できる情報の種類と量が増加することに対して、氏は「さまざまなデータベースを容易に利用できる」と言う。だが、そもそも何のためにデータベースを?と問うてみれば分かるように、この目的連関は決して「究極の善」に、したがって「人々の幸福」へと辿り着くことは出来なものである。百歩譲つても、各種専門家は別にして、一般人の日常生活に多種・多量の情報がいかなる関わりを持つているのかは、議論されていない。

さらに、情報の多様化・多量化への対応能力の開発が遅れている。それを最も期待されているはずの大学が、ニューメディアに無批判に振り回さ

れている状況であるといえよう。人間の進歩は機器の進歩に反比例するのだ、とも。

ロ、「双方向性により、情報利用が主体的になる」という点に関して、「例えば、テレビでは、既にある「視点」のもとに編集された情報を利用者は受け身的に利用せざるを得なかった。しかし、インターネットを利用すれば、さまざまなデータベースに容易に接近することができることから、利用者は自分にとつて本当に必要なと思われる情報を主体的に収集することができる」と氏は言われる。

だが、上にあげたように、人間は進歩し損なっている、と言わねばならない。(主体性 *subjectivity*) は今や機械・設備やあるいは浅薄な世論の指導下に *sub* 横たわつて *jacus* いる。

ハ、さらに氏は「コミュニケーションにおける幾つかの物理的制約から解放される」と見出しをつけ、「例えば携帯電話やパソコン通信を考えてみればよい」と言われる。だが、「問題点」の項に「対人関係構築力を低下させる恐れがある」とも言われるように、本来情報授受の主人公であるハズの人間が影を薄くしてしまつては、コミュニケーション(これを「分かち合い」としても) 自体が成り立たなくなるのである。

ニ、「コミュニケーションに対する個人的自由度が増大する」というのは、テレビや「ケータイ」が普及することを指しているのだが、実は文明の利器を買い揃えるために、人は無定見に自分の自由を「売り渡して」いるのである。死に体にある人間は自らの力では起き上がれない。

ホ、「新しいコミュニケーションネットワークが形成される」。これに対しては、ニ、の考察でお釣りが来るであろう。たとえばNHKで視聴者の投稿・ファックスで構成するラジオ番組が、最近になつて世界の各地からの情報を大量に採用し始めた。子供(のようなひと)たちは、世界の情報がリアルタイムに見聞出来ることはいいことだ、と喜ぶ。情報論においては、

われわれは手放しに喜んではいられないだけでなく、明確に問題点をくじり出して示さなければならぬ。情報が発信者の偏った（偏らないということとは原理的にあり得ないであろう）意図によって左右される好例にされるケースなのだが、このNHKの番組を聞いてみるとわれわれは、現代を生きる人間としての必要な情報を隠されることによって害を被るのである。概して投稿による構成番組では耳障りのよいことばかりしか取り上げない。さまざまな種類の海外生活者が、地域、年代、文化的関心等々において珍しい経験をした、というのがほとんどである。まちがっても「東チモール問題の本質について」の最新情報などはやらない。いや、われわれにとつてもっと切実な関心事であるベキ「原子力発電所の危険性」だとか「国旗・国家法の施行後」などというテーマで投稿する者が皆無だとは思えないのだが、「公共放送になじまない」といった理由で切り捨てられてしまう。要するに深みのある議論は国内のものも覆い隠して、毒にも薬にもならぬおしゃべりが「新しいコミュニケーション・ネット・ワーク」の名の下に世界を駆けめぐるのである。

へ、「地域コミュニティを補完できる」というが、そうだろうか。「例えば、災害時の通信手段として地域無線LANなどが重要な働きをすることになる」と氏は言われる。しかし、ここでも通信主体の問題が先に立つ。毎度の大災害（東海村のウラン精製工場の事故のみならず）の際に指摘されることは、ハードの即応体制があつても人間が動かないことである。マニュアルはあつても読み方が分からなければ、最先端の手足である人間によって簡単に改変されるのである。

ト、「娯楽の創出」。これは、recreationのcreationと言いかえてもいい筈のことからであるが、その前に今日、人間はcreationは済んでいるのだろうか。ラッキョの皮を幾ら重ねても人間の自己創造は始まらない。ヴァーチヤルリアリティーを有り難がる向きには「あなたは桃源郷装置で遊きます

か？」と尋ねてみるがよいだろう。^(二四)

今日、多くの人間が情報主体である身分から転げ落ちて、受容器であることに甘んじていると言われ、また人を発信主体に据え直そうとする煽動的運動が見られるが、いかがなものであろうか。多くの書物を書いて少しもその内容を問ひ直さず、「情報発信をしている」として誇らしげな顔をしている者はいかがであろうか。情報メディアに巣くひ、そのためにかかることを推進する人々は、行つてはいけないことを行つてはいないだろうか。メディア産業のやつてはいけないことは、「弁論術」のやつてはいけないことに含まれる。それは、人間のやつてはいけないこと、なのである……^(二五)自分の都合で、情報の受け手の感情を刺戟して振り回すこと、など。

情報業において「人間の行つてはいけないこと」が問題になるならば、同じくなすべきことも問われなければならないであろう。ここに先に引用したアウグスティヌス『教師論』の別の意味が顕わにならう。それは、先に触れておいたことだが、次のようなことである。

『教師論』の本論は、モノ・コトと言葉の対応関係を論じるものであるが、「モノ・コト」と言葉はいつも対に（遂に）なつて成立しているのである。ではそれはどこから、何によつて生じるのか。これについてアウグスティヌスはキリストと呼び（三八節）、後に「内的言葉」と呼ぶのであるが、ここでの議論は以上に止めよう。^(二六)

この内的言葉を顕わならしめそれへと立ち止まることは、今日の多くの人々のことは知らず、西洋の伝統においては人間の最大事と目されていた。すなわちキリスト教の戒、最大の戒は『申命記』6:5に基づき「全身全霊をあげて汝の主なる神を愛せよ」「汝自身のごとくに汝の隣人を愛せよ」「これに律法全体と預言者とが掛かっている」（マタイ福音書22:37-

と云われている。では、先ず愛すべき自分の神を我々はいかにして知るのか。隣人に如何にして彼の神を知らしめるのか？それをアウグスティヌスは論じているのだが、賑やかな情報メディアの騒音は我々の内への回帰を促す声をかき消してくれるのである。

(六) 情報公害からの救済の方法

右のようにやっつてはいけないことであるにも拘わらず、多数の人間が、他人を（踏み台にして）自己の幸福を間違つた仕方を実現しようとして、無数の情報を発信している。この傾向性は私が本論で指摘するくらいでは到底是正することなど不可能である。私に出来ることは、本稿を読む読者にしてこの害毒列島に居ながらにして害毒より浄められたいと願う人々に、その方法を提示する位のことである（害毒の害毒たる所以は、有用な情報・必要な情報を見えなくさせてしまうことである）。

あのミヒヤエルエンデ氏の『モモ』では、モモが時間ドロボウの灰色男たちに立ち向かい、町および町の人々を救済しようとする。その方法は、五年生を対象にしている書物だから詳述されてはいないが、読者に人間存立の根源を指し示す以外にはなかつたのである。

したがって、

①無常観を引き起こすこと。これは洋の東西を問わず行われている方式である。日本では道元禅師の『随聞記』、蓮如上人「御文章」など。西洋では *memento mori* の伝統。

②情報を一切シャットアウトすること

これでは有用な情報も届かないことになるが、ルソーの「性善説」を採れば、人は自然のままに置けば、自ずからまともに成長する。問題は人間の人工的な働きかけの方にあるのだから、それを一切シャットアウトすれ

ばよい。(二)節の④に「沈黙」を据えたのは、このためである。

わたしは現代の「マスメディア」に登場する「役立つ」と言う言葉にとりわけ敏感に反応してみた。放送界自体が、たとえば地方テレビ局が「地域に役立ち」としている「など」という発言をする大学人も見かけるのであるが、（役立つ）とはどういうことなのかは一切不明である。放送倫理というものは、放送界の関係者がいかに振る舞うかを論じるのではなく、放送業務が何を目的にして存在するかを（よく考えること）であるだろう。目的を定かにせずしては（役立つ）の何であるかは決して定かにはならないのである。小学五年生でも右に上げたエンデ氏によつては、（ともだちを大事に思う）（岩波『モモ』pp.101～103）の分析を求められているのである。論者がこの本質問題に盲いている限り、「メディア論」も「マスコミ論」も、まともな議論には成り得ないのである。

そこで世間ではマスコミから自己防衛する方法として、古くから新聞、雑誌を遠ざけることが勧められてきた（たとえばカール・ヒルティ「時間の作り方」^七）。今日では、新聞、テレビ、ラジオを一切シャットアウトするのは賢明な方法である。そして、メディア論は、この立場、あるいは立場の人々のことをカバーしなければならぬ。それが出来なければ、このメディア論は重大な欠陥を持っている、と我々は断せざるを得ない。

今や、生を養う言語は、新聞にもラジオ・テレビにもない。生を養う読書は別にあるのである。さらに本格的な生を養う営みは、別になるのである。

③しかし、ルソー自身の見解は問題を含む。したがって、これを凌駕して積極的に人間の目的を実現するためには、各自が人間の状況をよく考察し、自己の核を形成することによって自己に必要なものを判別し得るようになる以外にはない。

④そもそも高等教育は、「情報をいかに多量に取り込むか」に重きを置

いてはいけない。多量な情報公害に身を晒しながら、いかに健全性を保つかに、ピボットを移さなければならぬのである（この点は医学教育での画期的な転換を習うべきであろう。佐賀医科大学古川哲三元学長の仕掛けである）。そしてそのためには、「本来学ぶべきものを学ぶ」に如くはない。たとえばロバート・ハッチンズが「グレート・ブックス」を編纂した意図はそこにあつた。これは人文科だけでなく、自然科学の領域にもまたがる基本的な内容を含み、これを学ぶことが教養の一つの形を形成することになる、と考えられたのである。

材料は、むろんこれに限定される必要はないのだが、いずれにせよ、高等教育機関では、雑駁な知識・情報を与えるのではなく、厳選素材を用いて、学生の素純なところを育まねばならない。

991023

註

一、「社会生活の中の情報」とは何かという問題についてさえ、本質論が不十分であろう。たとえば、伊藤守・小林直毅『情報社会とコミュニケーション』pp.75-76の「情報過程」という語を持ち出し、情報というのは「知らせ」を音声、活字、文字、絵と言った「記号」を念頭に置いて考えてしまうが、雲のかたちや流れを見ながら、われわれは明日は晴れた、明日は曇りだといった判断を下す。この過程はまぎれもなく〈情報過程〉だ、と言う。雲の知らせ、虫の知らせというのはあくまでも「擬人法」による語用であろう。もし雲や虫の「知らせ」をも「情報」であるというならば、この奥にある神のお告げについて「情報論者」どのように論じるのか、聞かなくてはなるまい。

二、アリストテレス『ニコマコス倫理学』八巻、九巻参照。

三、『情報社会とコミュニケーション』（福村出版）p.76

四、同右p.76

五、アウグスティヌス『告白』第七巻二十章。

六、ものを形付けるものは「善」であることが後に明らかになる。こうなると、ここでいう形付けは意味を薄くする。

七、石川九揚『二重言語国家・日本』参照。

八、世界思想社『現代メディアを学ぶ』二〇〇二頁。

九、本年2月10日、NHKラジオ第一放送朝九時番組にて

十、アリストテレス『形而上学』一卷二章参照。ここでアリストテレスは、知者とは如何なる者かを論じ、①総ての事物の認識を有すること、

②困難で人間には容易に知り得ない事物を知り得る者、③正確な知、④原因の知、⑤効果のための知より知それ自体のための知、を有する者を挙げている……さらに、それらの知は第一原因の知に究極することを説く……。

一一、この本は端的に言つて、へことばとモノ・コトの連関について議論するものであり、モノの成り立ちを論じるものである。学習における記号の役割を論じる記号論である、と言つてもよい。

ところで、アウグスティヌス自身が議論の一息ついたところで、次のように言うことは注目に値する。

「お前に信じてもらいたいのは、この対話において我々はつまらない遊戯を始めたのでもなければ、……また取るに足りない平凡な善を志しているのでもないことだ。しかし、もし私が、幸福であると共に永遠でもある生……我々は神、すなわち真理そのものに導かれて、我々の弱い足取りにふさわしい段階を経てそこへと導かれることを欲するのだが……が存在するといふべきだとすれば、（幸福ということばによって）指し示さ

れることからそのものの考察によらず、記号の考察によってこのような道を歩み始めた私は、笑うべきものと見られるのではないかと恐れる。だから、私が遊戯そのものためではなくて、精神の能力と鋭敏さを訓練するために（それによって幸福の生の存するかの場合の温かさと光とに堪え得るだけでなく、これを愛することも出来るように）お前と予め遊びとして試みるならば、お前は許してくれるだろう。」（二二節）

取るに足りない平凡な善を志しているのではないというのは、全ての人にとつての最大の関心事である（幸福）（『告白』十巻など）に直結する問題であるということであり、記号の考察を通じて、精神の力を養い、かの幸福であり永遠である生に導かれよう、と言うのである。実に筆者がこの「情報論の序論的考察」において、この問題の欠落を最大事としていながらここにはある。

一二、トマス・アクイナス『神学大全』II-I部第一問題第三項。

一三、コミュニケーションを「意思の疎通」という程度にとつてそれ以上には問わぬ限り、かく評さざるを得ない。そしてその限り、ここにはただ機械的な意志疎通機構が問題にされるばかりである。しかしながら、たとえばパソコン通信をうまくやるためにも機械操作の（約束ごと）がある。機械にマニュアルが付随するのがそのよい証であろう。このマニュアルを使用者が勝手に作り変えたり、無視したりすれば、原発燃料工場ほどの騒動は引き起こさなくとも、少なくとも機械はうまく用をなさぬ。マニュアル無視でうまく行くとしたら、それはマニュアルおよび機械が未完成であるというだけのことであろう。機械を使うこと自体（技術）にさえ約束ごとがある。機械（技術）を何のために、何に向けて使うかには、なおさら約束ごとがある。人はこの、いわば太初からの生命の約束に即して技術を用いるか否かによって自らの生命の善悪を問われているのである（滝沢克己『競技・芸術・人生』）。

一四、現代の終末医療の最先端議論として、「苦痛、不快が無いこと」「よい人生だったと思つて死ぬること」が挙げられる。第二の点について、本当に「よい」人生であったかどうか、が問われずに済むならば、インフォームドコンセントを前提にして、末期患者の棺桶にまさにパーチャルリアリティの桃源郷を現出させ送り出すことも歓迎されるかもしれない。にもかかわらず、看護・医療の関係者はやはりこのインチキ性を感じ取つて、この装置を患者に勧めることをためらうのである。

一五、アリストテレス『弁論術』（岩波文庫）

一六、詳論は拙稿「何を学ぶべきか——アウグスティヌス『教師論』を読む」（創文社より刊行予定の教養論『教養の源泉をたずねて……古典との対話』に投稿中）に譲りたい。

一七、『幸福論』第一巻所収。